(十八日夕刊)
磐城新聞
休刊 第一第三日曜 定價 壹ヶ月 五十錢 郵税十錢 廣告料 一行 (增) 發行兼編輯印刷人 遠沼郁輔 發行所 福島縣平町田町拾六 磐城新聞社 電話五八〇番

平の藝術運動
平田哲

1、喇叭に就いて

喇叭が鳴り止んでから永らくになる。季節はひとゝでも廻轉して四分の三の風貌を覗かせてゐるにもかゝはらず相當活潑な様相を呈してゐた平に於ける藝術運動が――それは主として詩運動に限られてゐたが――最近どんど音も吐かず萎縮しきつてしまつたやうだ。

詩の喇叭は錆びたまゝ廢園の隅に埋もれてゐる。

秋風が動くとやがて人々は詩情をそゝり立てる。人々はいつか又詩の喇叭を朗々と鳴らす詩人の群の存在を祝福せんとしてゐる。けれども一體誰がこの輝やかしい喇叭手の名に値するのか。人々は廢園に散亂するブリキのラッパを振返ることを嫌ふであらう。ましてそのラッパを恥知らずにも鳴らしてゐたデモ詩人の肖像を思ひ浮べることは之を拒絶するにちがひない。そこで人々は時代、皮肉をなめさせられる。デモ詩人がかげらふのやうに浮かれ出んとする客観的な條件が成熟しつゝあるからだ。然も彼等の中には爪ゝ垢ほどもこの人々の榮譽を擔ひ得るものはないであらう。何ぜなればその十中の八九までは人々の中に生長しつゝあるのだから。人々はこれら眞の勇敢なラッパ手を待ち焦れてゐる。否待ちきれずに自巳の中に生み出しつゝある。今度こそ――片手には容赦なくデモ詩人を叩きのめす棍棒を握つて。斯く詩はいま時代と共に轉形期の脱皮をなし終へる。詩人が波であるならば激動する大衆の海に沈滞することは許されやうか。新らしき詩人は血に塗れた胞衣をひき千切つて誕生するだらう。しかも誕生は人々の闘争の中に數限りなく。

2、旗

これまで五指に餘る勝れた詩人を出し多少とも闘争的な變革的な傳統を保持しながら平に於ける藝術運動はその致命的な缺陷の故に遂に自巳の首に輪をかけてくびれてしまつた。そして僅かに眞の自巳を意識した詩人のみが過去を清算して新らしく出發せんとしてゐる。

その致命的な缺陷とは何を云ふのか。先づ客観的には現實の社會の情勢の中に見出されるのであらうがこゝには主観的なものとして方向が無かつたと云ふことを擧げやう「プロレタリアの藝術運動は常にその全運動と有機的なツナガリを保てあくまでもその組織學業を緊密に強固に結びつけてゐなければならない。藝術それ自身の立場に終始する、プロレタリア藝術運動なるものは無意味だそれ故にそれは個々の藝術家のアヂノキスチックな偶發的な行き當りバッタリの仕事であることは許されない。組織的な統一的な目的意識的な鬪體として藝術家達の存在の意義がこゝに見出される」

ラッパは旗と結びついて始めて方向をもつたのである。平詩人が誇るべきかの農民的な(特に三郎混沌氏らの)根強き闘爭性はかくしムダなく發揮されより闘爭的になることは疑ひないだらう。

3、武器

政策的に頗る狡猾な表面をはめて自由主義的な努力を惜しまなかつた濱口内閣の手によつていよ〳〵「蔓延する惡思想撲滅」のため全國の敎化機關は動員され既に藝術も又その有力な武器とされるに至つた。例へば北原白秋や西條八十等々の宣傳歌――やがてすべてのこれら御用藝術家が命令一下活動するまでになつた「武器と藝術」の爪をひたすら隱してゐる僧侶的なシ人達までも。だが今問題とするのはこんな大きなものではない。それは平に於ける藝術運動がこの全國敎化總動員とどんな風に結びつくかといふ問題なのだ。もつとはつきり云ふなら從來多少ともこの傾向をとりつゝあつた「シ南車」が(現在あるかどうかは知らないがこんな雑誌の代名詞的に)はつきりと之を宣言するだらう――從つて石城文藝協會とかいふものが――これはあるのかどうか知らぬがあれば尚好都合だ!)その中心的なグループとなるだらうといふ事だ。この事は誰しも豫想するだらう。それだけ又興味ある問題たるを失はない。早くから「武器と藝術」を宣言した人々は初めてその好敵手を見出したのだから。

4、宣傳

昔我偶然に讀んだり見たりしたもの、中から誰も招介しないやうなものを二三あげると。先づ

(A)シ誌「草原」と「ラッパ」だ。「草原」はもう六號になつてゐるやうだし纒つてゐるマジメな雑誌らしい。相當に伸びる力のあるシ人が一人二人居るのが心強い。

「ラッパ」はシと版畫をのせてゐるが期待すべきものはないと云つていゝ。けれどもこれからだと云つてゐるのだから待つてゐやう。同人諸氏の奮闘をいのる。兩誌とも。

(B)雄野勇氏のシ集「顔と樹」が出版されるといふ。常に平の藝術運動の尖端を走つてゐる氏の一燃ゆる冷知と自由への正義とをかざして新らしき現實への戰を宣するその「燃料」たるこのシ集は斯待さるべき一つのモニユメンタルなものだ。批評する機會を是非もちたいと思つてゐる(山形縣南村山郡宮脇、北方シ社發行定價五十錢)以上

明日の吉凶
新暦 九月十九日 舊暦 八月十七日

▲一白 心志動搖し易し人の誘ひに乘れば損失あり▲二黑 至極幸運の日にして思はぬ利得入り込むべし▲三碧 元氣の湧き出づるなるを以て奮闘すべし▲四綠 位置も高まり求めぬ財寶も集り來る大吉日▲五黄 近きより遠くの心掛けあれば剣々と進展す▲六白 十分と思ひて爲せし事も中途にて破れ易し▲七赤 利を得んとするよりも德を積むが發達の基▲八白 これまで意の如くならざりし事も立直るべし▲九紫 他に向つて多きを求むれば却て災を招ぐ

心地良キ秋ガ 訪レマス
秋向着尺 モスリント
帶御ガ澤山 入リマシタ
ゼヒ御用意ヲ
三丁目 鶴田屋 電話

小説
死を超ゆる者
三上於菟吉作 布施平八郎畫
(91) 岩頭の聖女(二)

けれどもなほ可成り激しく海から吹いて來る逆風は妙子の叫びを吹消して岩の女の耳へは聽こゑさせなかつた。男女は無言で波打際の方へ急いだ――殆ど駆けるやうに……。

たうとう男女はやつとのことで彼き足で目射す間近に來た。そして妙子に飛びつ息切れを感じる胸をホッと撫下させる間もあらせず、と同時にその女は俄に今は一切を思ひ捨てゝ生かしは死へと身を躍らすようとするやうに見えた。妙子は思はずアッと叫んだ、とその瞬間、村越は人業ならぬ素早さで岩角へと走り寄つた そして猿ひを延ばして、顧みもせず荒波に躍り入らうとする女をわらい力でヤットばかりにその女の帶際を摑んだ。

「何をなさる――」と村越は怒るやうに叫んだ

相手は答へずに身を藻掻いた

「まあ待つて下さい、お待ちなさい」

殆ど狂女の如くに藻掻いた彼の女には一向その聲さへ耳には入らず寧ろ力一杯に引裂くるやうに無言のまゝ………

村越は殆ど荒々しくその女の腰を抱いて、砂濱に引下した。女は濡れた砂の上

に崩れるやうに坐つて、兩手で顏を蔽やうにして顯垂れた。妙子は少し離れて茫乎と佇んでゐた、彼の女は感情の激動に死を決して遂に果さなかつた女と同じやうに蒼褪めてゐた。村越は兵兒帶の前に兩手を差込んで突立つてゐたが、やがて沈んだ聲で呟いやうに言つた

「僕村越です、御心配なく――」

靜かにぼんやりと力なげに顯垂れて居た女は、はつとしたやうに顏を擧げたが相手の顏を仰いで見ないうちにまた低く伏向いて了つた

「僕は村越です」と、男は繰返した。

「どうしてあなたはこんな處に……何も仰しやらずにお宿へなりお歸りになつた方が好いでせう。ひとりで此の土地へ居らしつてゐるのですか？どちみち僕達で見送つて上げませう」

とき子は何動かなかつた そして無言のまゝ何事も答へなかつたそして生氣をまるで失つて了つたものゝやうに、ぐつたりと居崩れて居たが急に涙が重たい雨のやうに砂の上に落ち始めた。

村越も妙子も沈默に落ちた、海面を横に射し渡す朝日の低い日影はまださう强くはなかつた、村越はゆるい弧線を畫がく美しい浦曲を見渡した

「さあ、ぐず〳〵して居ると、今にも漁師や散歩客がどう濱へ出て來ます、から言ふところを見たら皆んなが怪しむでせう、お歸りない、はやく〳〵、今言ふ通りお送りして上げますから」

「私、何處へも歸りません」と、き子は初めて泣き出しさうに拒むやうに身を固くしながら呟くやうな聲で言つた。その時、今まで少し離れた處に立つて居たへ子がツカ〳〵と近付いて村越に何事かを囁いた

村越はハ、アとばかりうなづいて言ひ出した

吉田眼科醫院

夜間診療
胃腸 内科 十二指腸虫病 專門 内科部
花柳 淋病 婦人病 皮膚病 專門 外科部
松村胃腸性病科醫院 (平南町電話一〇七番)

毛糸
本年は昨年より御安う御座います
毛糸見本帳進呈
一オンス 十五錢 十八錢 二十五錢
(中細・極細・スコッチ等) 澤山入荷致しました
平町田町 藤田女學校隣
ハシモトヤ糸店

相帽と冬帽
モダーンな若人向
スマートな紳士向
東帽製ファー 七、八〇
イタリー製ペロアプ 七、八〇
ウール 一、五〇ヨリ
に ツルヤ 平四丁目

安全第一
諸債券、公債ノ御用ハ迅速簡易ヲモツトースル弊店ヲ精ニ御利用クダサイ
營業課目
勸業債券 復興債券 公債其他 兩替 金融 質物一般 取扱
多田井商店 平町大工町

新築落成
耳、鼻、咽喉科 氣管食道科 (専門)
平町南町(舊診療所向電一七〇番)
大和田醫院 大和田郡司
自秋の便あり

平町紺屋町 藤沼醫院 電話五〇七番

芳醇無比
白馬の雪
松本德一吟釀 電話(平)七五二

時計、蓄音器修理ハ早ク良ク仕リマス
貴金屬 各國時計 眼鏡類 レコード 針先各種
高級ピアス號蓄音器特約店
金光堂時計店 平町五丁目 電話三三六番

秋氣訪れて涼味肌に迫り月光の下虫聲頻りに競ふ秋の夜長を蓄音器にて？

宮内省御用達
ヒゲタ醤油
醸造元 銚子醤油株式會社
特約店 平町田町 廣瀬支店 電話五四番

醫藥學大家實驗證明せる
腎臓病 新薬 ネオネフロン
急性及び慢性腎臓炎に服用して最も優秀なる効果顯著なり
價格 一圓五十錢、參圓、五圓
代理店 平町五丁目角 山野邊薬局 薬劑師 山野邊東次郎

營業種目
内地材 材木各種、羽柄材各種 建築諸材請負 礦山用坑木其他諸材請負
外材部 米松、米杉、大角製材調達請負 其他
佐藤材木店 常磐線平町新川町 電話三三五番

新築移轉
耳、鼻、咽喉科
合津醫院 平町仲田町七一 (電話五五九)

豫算緊縮したのは 郡下で二ケ村
それも僅かに一、二分程度 知事訓示も畫餅

石城郡町村長支會では過般亂暴極まる小柳知事の訓示に基く町村豫算天引編成替ひについては如何にしてもこれ以上の緊縮は不可能であるから知事の訓示は尉斗をつけて其の儘返上するに如かずの硬論さいあつた程で其の後各町村は兎も角出來るだけ切り詰め樣と目下大馬力で編成中であるが最初可能の胸算を立てた町村もイザとなるとこれも駄目あれも駄目で案外減額の出來る費目がなく頭痛鉢卷の体である石城郡內で決定した町村僅に磐崎鹿島の二村に過ぎず本月中に覺束ないといつてゐる町村さへある

△磐崎は頭初豫算五萬四千七百六十四圓中二千五百四十六圓減の二分一厘即ち現在額より見れば僅かに一分强

△鹿島は一萬六千三百五圓中六百六十一圓減の二分五厘即ち現在額より見れば亦一分二厘强である

醉拂つて溺死 石城

郡上遠野村字瀧無職小泉初太郎(五七)は性來の好酒家で十六日午後八時頃友人の大友令朝吉方で酒を御馳走になり危ないからと止められたのもきかず過日の豪雨で交通杜絕になつてゐる藤川橋を渡步中誤つて轉落溺死した

石城の持米不足で 他產米續入
二百廿日も祟つて 米價漸騰の氣配

石城郡に於ける白米（四等米）の相場は一俵十一圓二十七錢で取引きされ七月一日十一圓十五錢の相場に比較して十二錢高値である。收穫期を前にして相場が高くなつて來たのは品不足の結果であつて七月一日現在中穀物檢査所に於て調査した石城郡の在米高は

▲地主米　一〇、四一五石
▲自作者持米　三、四八五
▲小作者持米　五、八八二
▲商人持米　六、七四八
合計　四萬五千五百三十四石

であつたが、七月以降九月中旬までに於ける二ケ月中石城郡に於ける白米消費量は四萬八千餘石であり持米では不足を告げてゐる程でこの不足は他地方からの移入米に依つて補充して居り七月以降の移入米高は一萬一千百七十石に達し持米高と合計すると五萬六千六百九十四石となり之から消費量を差引いた七千九百六十九石が九月中旬現在に於ける石城郡の在米高であると毎年收穫期に近づくに連れ持米高の減少するのは當然であるが例年は一萬石程度であつて今年は餘程減少を見てゐる譯である豊作に喜んでゐた夢を一朝にして破られ平年作程度のものと殆ど確定的に豫想されて來た結果と持米が減少した當然の歸結として石城地方白米の相場は漸次昂騰するものと見られてゐる

鬪爭の能力を失ひ 爭議は自然消滅
長屋撤去も猶餘して 小田坑騷ぎ鎭靜

石城郡好間村小田炭礦の從業員坑夫の黑羽彌助外四名の復職要求は拒絕されさる十四日遂に解雇された事は既報の如くこれ以上日本大衆黨石城郡好間支部でも運動を續ける勇氣もなくその儘の加く思はれてゐたが突如十六日午後坑夫側幹部の淸水眞澄外三名の大衆黨は事務所に社長荻原中八氏を訪ひ馘首された坑夫黑羽外四名の他に職業が見つかるまで家族共に長屋に居住せしめられたきこと並に相當の同じよう金を支給して呉れと要求したがこれも斷然刎ねつけられたが大衆黨としてもこれ以上運動を繼續する模樣もなくただ馘首された五名の者は十五日まで長屋を撤去させる筈であつたが馘首組の懇願により來る二十五日まで猶餘する事となり大衆黨も全く爭議の能力を失つた模樣であるから同問題も一段落を告げたと觀るべきである

拾つた指輪 屆けぬ藝妓檢擧

石城郡磐崎村字一本道水仕橫田かつよ(二四)は双葉郡富岡町大字小泣藝妓屋春野家事遠藤淸一方に雇はれ中同家抱ね藝妓金時事小野よみが遺失した金指輪二十八圓を橫領使用して居つたこと發覺し十六日富岡署に檢擧された

人妻の家出 夫から搜查願ひ

石城郡錦村居住作男內藤妻宮城縣名取郡增田町生れ山引スモ(三九)は去る四日午後八時頃無斷家出をなし行方を晦ましたが平町附近に潜伏してゐる形跡があるので作男は此程平署に搜索方を願ひ出た

煙草を一本 脅喝で告發

平町字揚槌小路居住中發電所職工山崎安治(三〇)は十六日午後八時ころ友人數名と飲酒した揚げく南町附近を徘徊し折から同町カフエー花月亭で飯酒中の平町字長橋町酒屋業大谷松芳(三二)に喧嘩を吹つかけ煙草一本を脅喝したことを發角し未青年禁酒法違反並に脅喝で告發された

平郵便局の 集配時間改正

平郵便局では列車時刻の改正に伴ひ十五日から郵便物の集配時刻改正を行つたがこれがため大体から見て局にも一般にも便利となり殊に小包みの配達出發は毎日午後三時半だつたのが午前八時に改められたので今までのやうに一日おくれて配達されることが尠くなり非常に双方共都合がよい改正集配時刻左の如し括弧內は舊時刻

△取集め
一號午前六時十分（七時）
二號正午（零時半）三號午後六時半（七時）

△配達
一號午前七時半（舊通）二號午後零時半（舊通）三號三時半（三時）

△小包配達
午前八時出發（午後三時半）

喧嘩 大酒喰つて 平署で取調べ

石城郡湯本町入山炭礦社員靑田義德(三七)は十五日の公休日に自宅に於て友人四名と共に八升の酒を呑み同日午後一時ころ居合せた瀨谷駒吉(三六)と喧嘩をはじめ瀨谷を散々に毆りつけ全治一ケ月の重傷を負はせたので目下平署で取調中

藤原の火事 蠶室から發火

石城郡磐崎村藤原字向坂農高木一方の蠶室から十六日午前零時頃發火し同家一棟を全燒をして一時鎭火したが原因は蠶室のダンロの火からで損害取調中

平三校委員會 平町

第三小學校の建築委員會は十八日午後二時より町役場に開き建築工事監督打合につき協議した

家出の人妻らしい 豐間の疑問死體
平から自殺の手紙を 平署各地に紹介

石城郡豐間村沼の內海岸に漂着した女の死体は十六日解剖の結果大体自殺と判明したので平署ではその身元につき各地に照會中であるが死体に纏つてゐた腰卷の縱糸を端緒に調査した結果右は茨城縣那珂郡神崎村住谷みす(三三)らしいと見當をつけ即刻調査を開始した同人はかねて同郡上野村關和助方に嫁入りし家庭の事情で實家に歸つてゐたが去る七月二十九日無斷家出し八月二十四日付で平局の消印ある自殺の旨の遺書を實家へ送りそのまゝ行衞不明となつてゐたものであると

共濟委員會 鈴木氏の送別茶話

石城郡方部共濟委員鈴木積番氏は今回東京小石川會館の理事長となつて今月末赴任に決定したので方部會では二十三日午前十時から磐城訓盲院で打合會を兼ね茶話會を開くことゝなつた

寄附を仕度い 平町

四軒町では工費五百五十九圓を投じ火見換と水管置場を建設したが今回之れを町役場に寄附したいと區長から十七日町役場へ採納方を願出た

平水道起債 目鼻の付かぬ 遠藤助役歸る

平町上水道起債認可速進運動の爲め助役遠藤長誠氏は十五日上京內務省地方債課訪れ陳情する處あつたが目下事務的に調査中で採否何れとも豫想を許さぬ狀態で十六日夜歸平した

◁◁◁◁◁平町の霞ケ關◁◁◁◁◁
三ケ月後に出來上る 平署附近役所街

平警察署も漸く移轉したので今度は各種團体の落ち付き場所が決定すれば平署の移轉による凡ての事が終りを告げる譯であるが現在各種團体が執務してゐる會議室は三ケ月間の中に明け渡さねばならな條件つきなので團体に拂ひ渡された舊平署の建物について石城郡農會は十六日建物を視察し移轉費用約二千圓を捻出方法を講ずることになつたが各種團体事務所は現會議室北橫手の縣有地元上席郡書記有舍を移轉させた跡に約五十坪の總二階建のものを建設されるが結局舊平署の舊廳舍をその儘使用することになるのであるが尙は新らしくたてた舊平署の建物は土木監督所を增築することに使用し殘部をもつて穀物檢查支所を建設することに決定してゐるので元郡役所附近は官公衙が一ケ所に集合することになり平町の霞ケ關として一般から非常に便利になつたので喜ばれてゐる

白銀青年團 キネマの夕開催

平町白銀青年分團では基本金造營の爲め來る廿二、二十三日の兩日平町聚樂館でキネマの夕を開催する事になつた名畫「雄飯」七卷、實寫「小名濱築港起工式」二卷、正傳「加藤淸正」全十卷その他で大原錦陵師出演琵琶彈奏がある筈

記者募集

中學校三學年修業程度の學力ある眞面目にして身体强健なる青年記者二名を募集す、但し平町在住者に限る（保證人を要す）希望者履歷書持參本人午前中に來社あれ委細面談電話、書信の交渉絕對謝絕

磐城新聞社

平第三校建具 平町

第三小學校の建具入札は十七日平町役場で執行入札者六名にして五丁目片寄小彌太氏に落札した

劇と映畫
竹の子三日目

聚樂館に開演中の下山竹の子一行は非常の好評で連日滿員の盛況を呈してゐるが第三日目（十八日）替り狂言は△笑劇哀と哀二幕△現代劇れ愛ちやん一幕△時代劍劇會津の虎徹四幕△喜劇百々夜車二幕

植田事件の眞相
小柳內春千代の魂膽（三）
默鐘生

妖婦春千代が胸に秘めたる魂膽を情人成瀨巳三君に打ち開けて一仕事をやらかそうと春千代は成瀨君に會ふことに焦つてゐた、そして春千代は成瀨君に會ふやいかにも大事件の發生したかの如く其目に其顏全体に眞實らしさを裝ふ表情もて語り出した

×

春千代が情人成瀨君に語り出した顚末を書く前に春千代と成瀨君の情的關係を茲に簡單に書いて置く必要がある、春千代の主家小柳は縣會議員であり植田町長でもある驚濟昇氏の持家である、成瀨巳三君は民政黨系の男として特に驚氏とは親分乾分の關係に置かれてゐる、そうした關係から小柳の板塀を造るにしても其他の用件につけても家主である驚氏の代理として足繁く藝妓屋小柳に訪づねる事が多かつた、其時一人のノールスの割合には人目を惹きそうな美しい女がゐた、それが問題の春千代だつた、木石ならざる成瀨君の心もやがてこの妖婦春千代に惱殺されて行つた、成瀨君の熱情と心意氣から春千代も亦成瀨君をしていとしき殿御として忘れがたなき愛人として迎へるやうになつた、それから春千代は愛人成瀨さんが民政黨なら妾も民政よ……と云ふ具合で自稱植田の民政藝妓として羽振りをきかせようとしたのだ

×

その春千代が情人成瀨君の前でウソ八百をならべて語り出した（情景を彷彿さ せるために以下對話的にする）

春「ナーさん大へんよ、大へんなことができそうよ」

成「ソリヤなんだい、だしぬけに大へんな事件とは」

春「それは大問題よ、妾ほんとうに驚いちやつたは、それこそ大へんよ」

成「大問題とはどんな事だい、駄目じやないか、こんなにいきせき切つては、落着けよ」

春「アノネ……山崎登さんとネ、鈴木林さんとネ、中の高木さん、鈴木さんの四人が料理屋に會合して大へんな相談がしてゐたワ」

成「ウーそりやどんな話だ」

春「山崎さんを中心にして四人が驚町長を袋たゝきにし、鮫川にぶち込むといふ怖ろしい相談よ、そして其日は平の青年團の方が鮫川にいらつしやるので青年の力を貸りてやるんだそうですよ、山崎さんが大將になつて……わたし怖くなつちやつたは」

成「ウム、そりや大事件だぞ、驚さんをばらすといふんだな、洲卷きにするといふ譯だな、こりや一大事だ」

×

妖婦春千代のペロリと出した赤い舌に成瀨君はまんまとまきこまれて行つた、常人ならば一藝妓の非常識な物語りを眞に受ける筈もなからうに、そこは熱い情に繋かれてゐる二人の仲、成瀨君もこのウソ八百數々にスッカリ醉ひ加減だつたするを數日經つと福島毎日新聞に「咄洲卷事件」とい ふ二段拔き標題の記事が掲載された

×

……山崎某と名もなき小町ノ旬刊新聞記者二名、政友派新聞通信員一名と植田町の料理屋に會合し、驚濟昇氏を袋たゝきにして鮫川に放り込むといふ所謂洲卷事件がある、而して當日は平町青年團區劃團長も是れに加擔するといふ、この陰謀に對して植田警察署長は默認するだらう、大體以上な意味の記事で報導された

相當社會のセセツヨンを喚び起した事は事實だ、それだけに春千代の魂膽が圖に當つたものでここぞと薄氣味惡い笑をもらして快哉を叫んだ、夢にも思はぬこうした新聞記事の出まかせには俺はほとんど開いた口が塞がらなかつた、新聞記者は俺は豐間から九月一日に歸平したばかりだつたから、それまでは全然知らずにゐた、春千代が何故にこうしたウソ八百をならべて情人成瀨君に訴へ大膽不敵もせめて新聞記者によつて山崎氏を始め俺たちを煙に卷き込んで凄い笑をもらしてゐたか、それには次のような記りがある　（續く）

植田町本町
前田醫院
…入院隨時…
電一二四番

內科、小兒科　市原卯太郎
外科一般、婦人科　市原睦郎
外科、梅毒、淋疾 皮膚病　市原三三男
平町田町本通
市原醫院
（入院隨時）　電話一一四番

一圓十錢のフランス
マルソー會社元詰
マルソー、ブランク
マルソー、ルージ　生葡萄酒
優良にして安價賣行き飛ぶが如し
平二　**西村屋藥舖**
たはなし　三番

改正　片濱乘合自動車時間表
平發　五時三十分　六時三十分　八時　九時　十時　十一時　十二時半　一時五十分　三時　四時　五時二十分　六時三十分
江名發　五時三十分　七時　七時五十分　九時二十分　十時三十分　十一時五十分　一時　二時　三時三十分　四時四十分　五時四十分　六時四十分
平のりば　四丁目和泉屋前　新川町車庫
江名のりば　沖見屋　松屋　電話十四番
鈴木片濱自動車部
電話二一七　車庫呼出 電話一四二

內科診療
消化器病科　呼吸器病科
小兒內科　一般內科
入院應需（自炊ノ便アリ）
平町鼠坂
渡邊內科醫院
電話六一番

靴の御新調は……今
時節柄……空前の安賣
キカイ製靴より安心なる
定評有る大塚の自製靴を
流行新型ゴロフ形
△ボックス革實用　短靴七、五〇ヨリ　編上靴九、〇〇ヨリ
△赤革スポート　短靴九、〇〇ヨリ　編上靴一二、〇〇ヨリ
修繕二十四時間內迅速安價
大量製產 堅い店
平町田町
大塚支店製靴部
電話七〇二番

X光線
外科專門
入院隨意（自炊の便あり）
平南町
上田外科醫院
電話一二九